



信心の定るとき 往生また定るなり

地球温暖化によって世界中の気象が激変していると言われていても、気がつけば今年も変わらず陽が短くなってきていて、先人たちから語られてきた、「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉に「そうだなあ」と頷かされ、普遍的な重みに気づかされて秋のお彼岸を迎えます。

しかし、今日の日常生活では、仏教（宗教）が必ずしも身近な存在としてあるとは言えません。その反面、見方によっては昔より形式や儀礼の方へ偏りがちです。本来、日常生活の中に自然に自由に肩肘張らずあった信仰生活の温かさが薄れ、それが生活と宗教というものの間の隔たりを大きくしていつているのではないかと淋しく残念です。

* * *

今月の法題に選んだ『信心の定るとき、往生また定るなり』の言葉は、親鸞聖人の思想と信心を的確に表した代表的な言葉ですが、現代社会の概念ではほとんどの人が、「往生」という言葉を聞けば死を連想し、生きることと反対の意味に受け止められています。

私たちは生まれ出て人生をスタートしたその瞬間から、自分（人間）の力では解けない大き

な問題と共に生きていきます。この私はいったい何のために生まれてきたのか、この命が終われば自分はどうなるのかという人類永遠の問題です。この問題が正しく解決されず、いつも心を覆ったままの人生の不安は、はかり知れないものでしょう。

* * *

仏になる教え「仏教」を開いたお釈迦様のお説法は多くの経典となって、それぞれに仏の智慧と仏になる道が説かれています。それらの教えに従って、自分が迷いの世界にいることに気づき、真理を見るように努めようとし、その大切さに気づいたとしても、煩惱の心は次々に起こり、すぐに元に戻ってしまうのが我々凡夫の姿です。

親鸞聖人をして、9歳からの20年に及ぶ比叡山での修行、しかも非常に優秀な僧であったそのすべてを捨てさせたお念仏の教えは、すでに法然上人が選ばれていたお釈迦様の説法「大無量寿経」の聖典に書かれてあった、「すべての人々が仏になる道（教え）、浄土往生の教え」でした。「すべての人を浄土に迎い入れ、仏にできなかったら、私は仏にならない」という阿彌陀如来の誓いです。その大慈悲心には、人生の善し悪しや、死に方など何の条件もないのです。ただその本願を信じて生きる人は、ことごとく「浄土」という

真実の生命の世界に入ることが約束されていると説かれています。仏という大きないのちを信じる人は、死ぬのではなく生まれる世界「お浄土」に往って生まれる、それが「往生」であると説かれています。今その往生が正反対の意味で使われているのです。

* * *

親鸞聖人は、煩惱具足の自分こそが仏の救いの目当てであり、そんな親鸞のための大慈悲心（救い）であったと喜ばれ、ほんとうに「まかせきる」とはどういうことなのかを自らの生涯を徒して愚直に貫いて生きられました。その生き方こそ「今をどう生きるか」の信心のお姿だったので、「後生の一大事」とは今を生きる私の問題なのです。

『真実信心の行人は、攝取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定るとき往生また定まりなり』

往生は、死ぬときという未来ではなくて、仏さまを信じた瞬間に解決されるのです。亡くなられた方々は仏となって導いて下さっています。私たちが口にする「南無阿彌陀仏」のお名号は、「あなたも同じほんとうのいのちの世界に生まれるのだよ」との仏さまからの呼びかけと響き合っているのです。

合掌

奏庵法座
彼岸会

日時
9月26日(火)
午前11時～

「み仏に抱かれて」
阿弥陀経
住職法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

夏というのに太陽が恋しく感じられた雨の多い毎日でしたが、お変わりなくお過ごしでしょうか。

歳とともに、めまぐるしく変化する環境に取り残されそうになりますが、日に日に秋の気配が増してゆく季節の移ろいをいち早く楽しめているのは、歳を重ねたおかげかもしれません。

秋のお彼岸会の集いです。どうぞ急がずゆっくり、気をつけて、お参り下さい。



仏教が生んだ日本語

【遊び】

「遊び」という言葉には何かしら後ろめたいものを感じるかもしれないが、「遊び」やその動詞「遊ぶ」は仏教用語であり、本来、「住む」「巡り歩く」「くつろいで留まる」「ゆったり過ごす」という意味で、その原語がビハーラで、「精舎（僧院）」と訳されている。仏教系のホスピスにその名が付けられるのはその願いがあるからである。

仏教では、説法して歩き回ることを「遊行（ゆぎょう）」といい、「遊戯（ゆげ）」とは菩薩の自由自在な活動のことで、仏の境地に徹して人々を導き、それによって自らも喜び楽しむことである。この概念は、教化するものとされるものが一体となって自由になるというカウンセリングとも会通し、「遊び」とは、人間本来のあり方に帰することを意味する。

人間が遊びを志向するということは、宗教とか、西洋・東洋とかいう以前に、人間存在の根底に「遊び」があり、人々がそこに帰ろうとしているのだということである。この視点は、人間の、特に非行少年の更生に有効であると言われる。このような意味は、「車のハンドルの遊び」というような現代用語に使われているのも面白い。

参考・大谷大学編

本願寺が蓮如上人の大遠忌に沸いたのはバブル末期だった。その頃、五木寛之氏が盛んに蓮如のことを題材にした著書を書き出した。もともと真宗思想の下地があったのだろう、作家として名を馳せてから本願寺系大学院で学び直したりもされていたから、決して「蓮如バブル」に乗っかろうとしたとは思わないが、当初のそれは、蓮如ファン気性が優先した流行作家らしい内容で、教義に縛られる宗門僧には、その「素人受け」に、部外者に許される自由への少なからず批判的な感情もあったものだ。

■そんな氏が某有名週刊誌に、エッセイ「生き抜くヒント！」をずっと連載している。その文脈が歳とともに味わい深くなってきていて面白い。私ごときが評するのは憚れるが、同じ親鸞聖人の教えに生きる者の感想だから言わせてもらおうと、若さのあるときには「悪人」にならなければと意図して無理していたのが、自らの衰えとともに「愚」を無理なく我がこととしていかれている。親鸞と蓮如が、

「カッコよく生きたい」という彼の美学をずっと貫かせてくれているのだ。■そんな私は、お寺に生まれて育ち僧侶となって人生を送っている。僧侶とは「出家」した者をいうのに、実態は家から離れられない、出家とは遠い現実的な生活。「出家」とは「大いなる放棄」だから、微々たるしがらみさえ断ち切れない人間には、したくても出来ない「贅沢」だったが、人生後半も半分以上過ぎた今、その贅沢をしてみたいと思うことがある。

■それは「何だっていい」と思えるようになることだ。だからと言って聞かずに閉ざしたり目をそらしたりするのは悟っているようで嫌味だ。善であれ悪であれその中にふんわりと存在して、後を恐れて語ったりしったりせず、たとえ道徳や常識から離れても、それが「苦」とならず生きれたらいいなと憧れるのだ。それが出家者たる悠々自適なのではないかと思う。お金や健康はあってもいいが無い方が格好はいい。「衰える者のええカッコ」も、今までの「若気の至り」も、親鸞のおかげで楽しく、自分なりの帳尻も合わさせてくれるだろう… Norimaru